

かわら版 第6号

歴史館 外伝 一とある生涯—

俺はずっと昔に田嶋町の一角で生まれた。母さんは、俺と同じように色白だったと聞いている。けれど、小さな頃にみなしごになった俺には、母親の記憶はない。

俺がまだ子供の頃、寒い冬の夜、一緒に肩を寄せてくれた姉さん方、俺、本当に感謝しています。俺、男だから、姉さん方にいつまでも頼ってる訳にはいかないです。俺、馴染みの姉さん方をいじめる奴らには毅然と立ち向かった。喧嘩のいろはも知らない若い頃の俺、無鉄砲に任せて、何度も死ぬような目にあった。俺、大人になっても、熱血漢は相変わらずだったから、ちょっとしたいざこざでも、本気になっちゃうことが多くてさ…。だから体中に傷跡残ってる。

そんな毎日を送ってるうち、俺はいつしか田嶋町のボスとなった。そんな日々が10年以上続いたか…。こんな強面の傷だらけの俺でも、好いてくれる女がいた。自慢じゃないけど、俺、夜の巷で浮名を流す女が何人もいたな…。皆、きつぷのいい、小股の切れ上がったいい女だった。ああ、もう一度会いたいね。

けど俺、若い頃に気張った分だけ、年とってガクっときた。俺の弟分の色白の奴、勢力を拡大し始めてるのを見ていたけど、でももう俺には対抗できる力がないと悟った。で、俺、さっさと隠居生活を決め込んだ。

隠居生活ってえもんは、いいもんだね。おとなしいふりをしてたら、みんなに可愛がれる。適当に愛想ふりまいてりゃ、毎日の食いぶちの心配もない。お気楽な人生だ。

そんな余生の日々、ふと気がつく、ひもじい腹を抱えて俺の後をいつもついてくる小さな娘が居た。聞いてみると、俺と同じようにみなしごだと。俺、無学だからさ、あんまり教育のことは判らないけど、とにかく食べさせることだけはなんとかしなくちゃいけないと、いつもの俺の行きつけの場所に連れて行って食べさせたんだ。

俺がしたことはそれだけ。だって、1人で生きていくと覚悟を決めたら、いろんな経験をして、人生から学ぶしかないんだから。

俺、この娘と出あってから間もなく、下痢が止まらなくなった。末期がんだった。歩くだけで下痢便が漏れ、尻も足も汚れてただれ、皆から“臭い”“汚い”と嫌われ、俺は、誰からも疎まれる存在となった。「あーこんな情けない姿をさらしながら生きていくのはつらい」と思った。なのに、こんな俺をこの娘だけはいつも慕ってくれた。

恥ずかしながら、いつしか俺は、この娘を「老いらくの恋」で愛するようになった。娘も俺を受け入れてくれた。俺、生まれて初めて自分の子を懐に抱いたんだ。俺の人生の中で一番の幸せな瞬間だった。末期がんでよれよれになって死にかけてる俺、元気で暮らしている妻と子供達を見守ることが、何よりの幸せだった。

なのに、さよならは突然訪れた。

俺、がんが体中をむしばんでたけど、でもまだもうちょっと家族と一緒にいられると思ってた。なのに、不覚にも交通事故で即死。

俺、あの世に上って行く途中、妻と子供達が“お父ちゃん、私達頑張るからね。見守っててね。”の声、確かに受け取った。

こんな俺だけど、すごく迷惑かけても面倒見てくれた人達が、別れの涙を流してる姿見て、俺、あの世に行っても、この恩義は絶対忘れないと心に誓った。

これは、小林歯科医院の周りで長年暮らしていた野良猫シロの猫生を擬人化したストーリーとして、院長横田が書き記しました。



元気な頃の野良猫シロとみなしごチビ

“赤の他人”なのに、2匹はいつも、こうやって寄り添っていました。

みなしごチビが産んだシロの子供達4匹は、すくすくと成長し、2匹はご近所にもられました。残る2匹も里親が決まりました。